



平成21年度 文部科学省委託
「人権教育推進のための調査研究事業」

じんげん2

ぼくのペースで行かせてね
逆転(停電/手話通訳/勝利の女神)



はじめに

じんけん ひと ひと しあわ い
人権は、人が人として幸せに生きていくために、

う まれながらにして も 持っている、かけがえのない けんり
生まれながらにして持っている、かけがえのない権利です。

に ほん こく けん ぽう みつ き ほん り ねん ひと
日本国憲法では、三つの基本理念の一つに

き ほん てき じん けん そん ちやう うた おか
基本的人権の尊重を謳い、侵すことのできない

えい きゆう けん り ほ しょう
永久の権利としてこれを保障しています。

げん じつ し し ちが
しかし現実には、知らず知らずのうちに、みんなと違うものへの

へん けん さ べつ い しき じん けん しん がい しょう
偏見や差別意識から人権侵害が生じています。

え ほん き
この絵本が、そのことに気づき、

じん けん ふか ひろ かん が
人権についてさらに深く広く考える

ねが
きっかけとなることを願っています。

平成21年度 文部科学省委託
「人権教育推進のための調査研究事業」

じんげん2

- ぼくのペースで行かせてね
- 逆転(停電 / 手話通訳 / 勝利の女神)

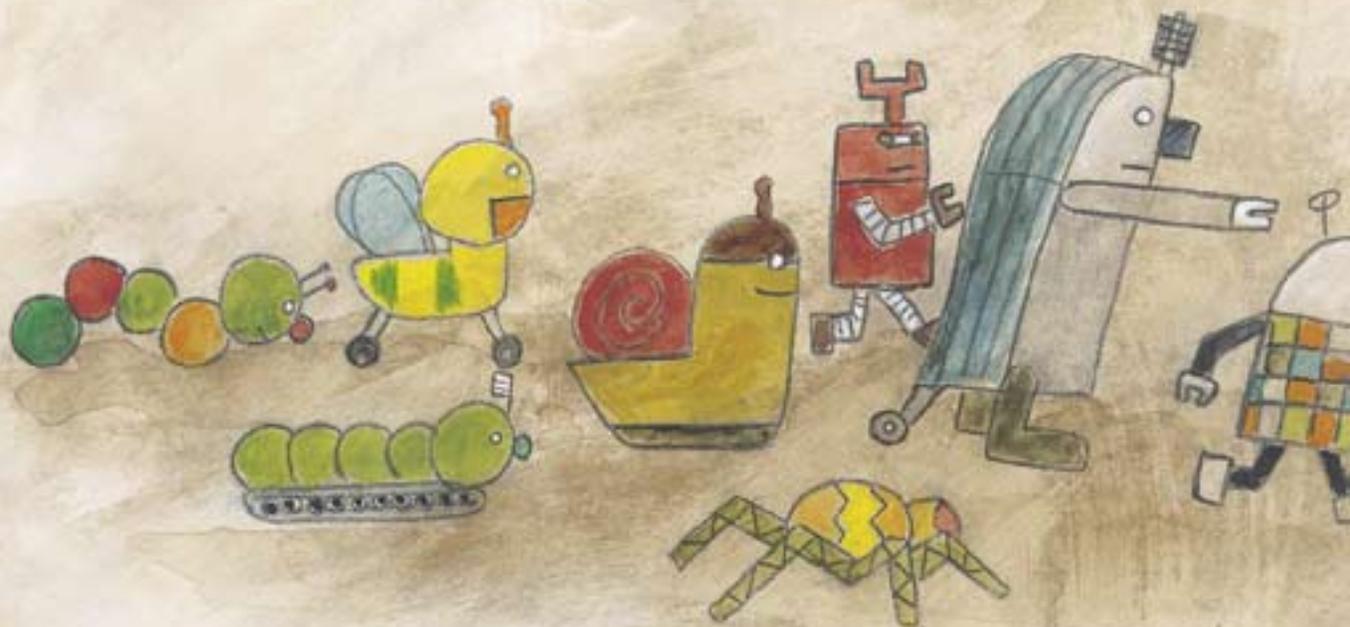


ぼくのペースで 行かせてね

やまもと めぐみ え
山本 希 / 絵



「位置^いについてー! よーい… ドーン!」



ぼくは走る。颯爽と走る。

カッコイイ!

みんなの姿は遠くになってるけど。



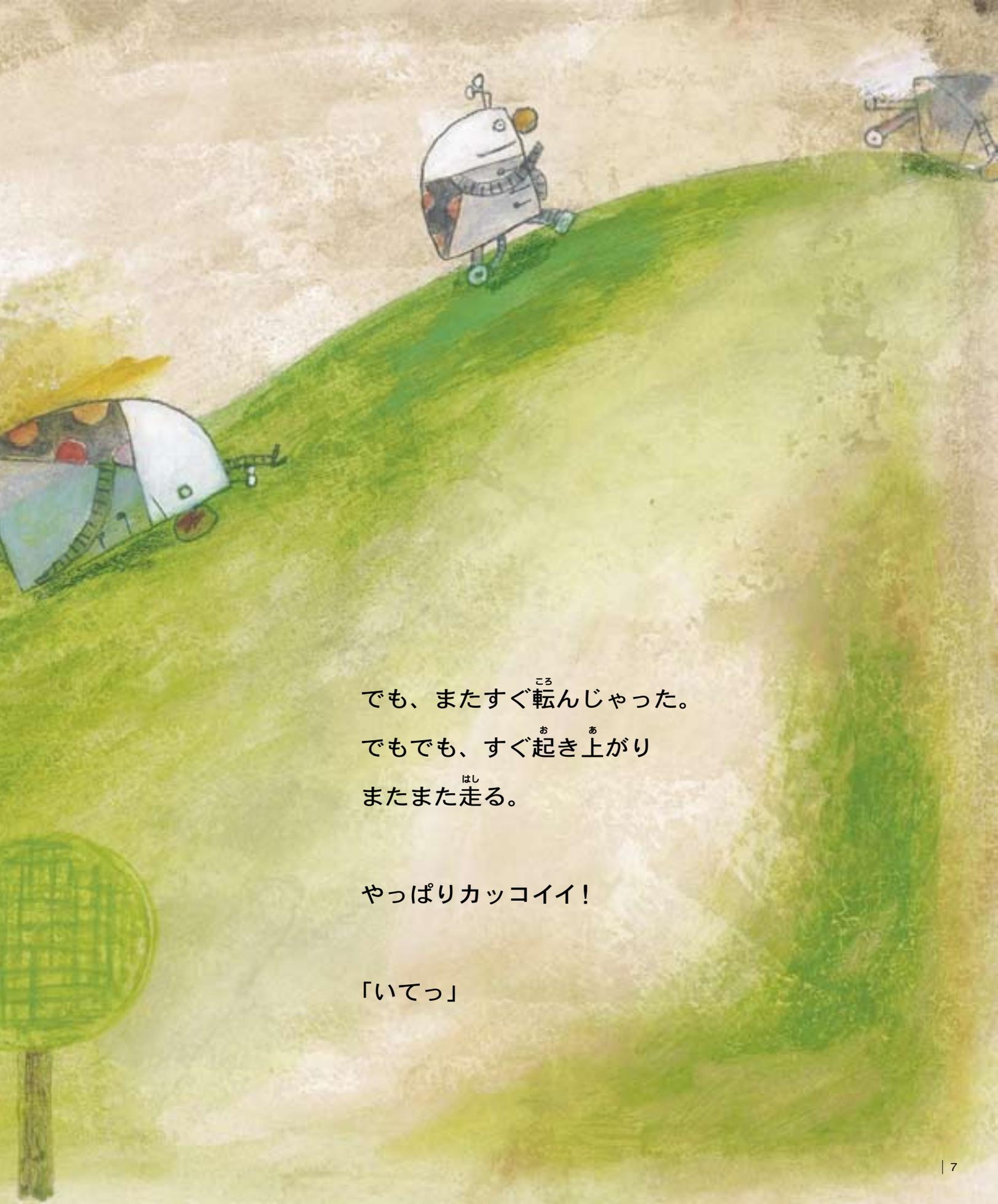
ぼくは走る。颯爽^{はし さっ そう}と走る。

すぐに転^{ころ}んじゃったけど。

まあ、いつものこと。

お^おあ^あがり、また走^{はし}る。

カッコイイ!



でも、またすぐころ転んじゃった。
でもでも、すぐあ起きあ上がり
またまたはし走る。

やっぱりカッコイイ!

「いてっ」

こ^んど^はで^ころ
今度は派手に転んじゃった。

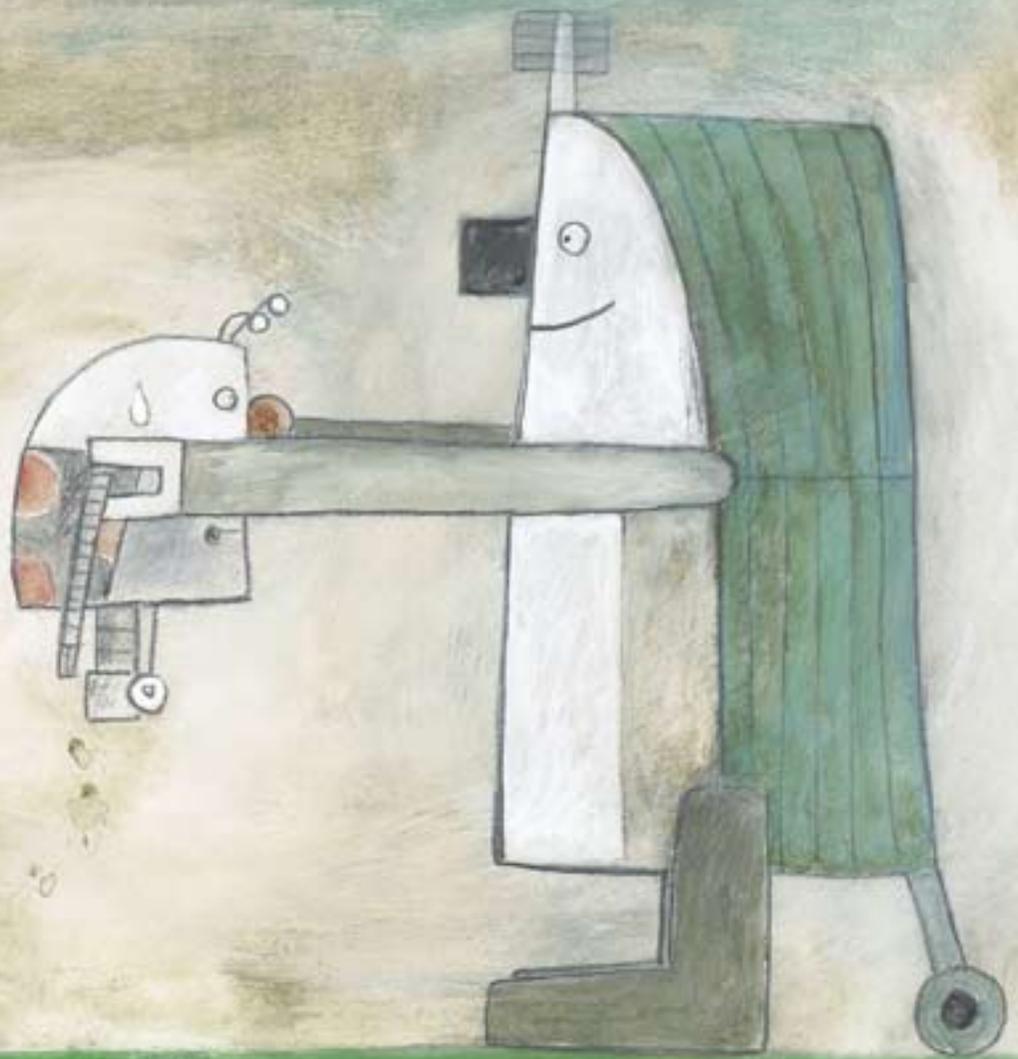
お^あ
(すぐに起き上がるのはヤ～メタ。

き^{ゆう}けい
ちょっと休憩しよ。うん、それがいい)



か^って^から^だも^あ
ところが勝手に体が持ち上がり、
た
立っている。

(ん? なんだろ?)



お お起こしてあげたよ。 がんば頑張って！」

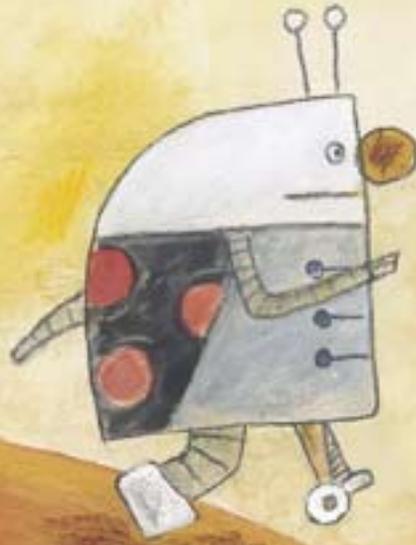
と、お友達の声。
とも だち こえ

「ありがとう」

うれ（嬉しいなあ。でも、もうちょっと

やす休みたかったなあ）





ぼくはまた^{はし}走りだす。

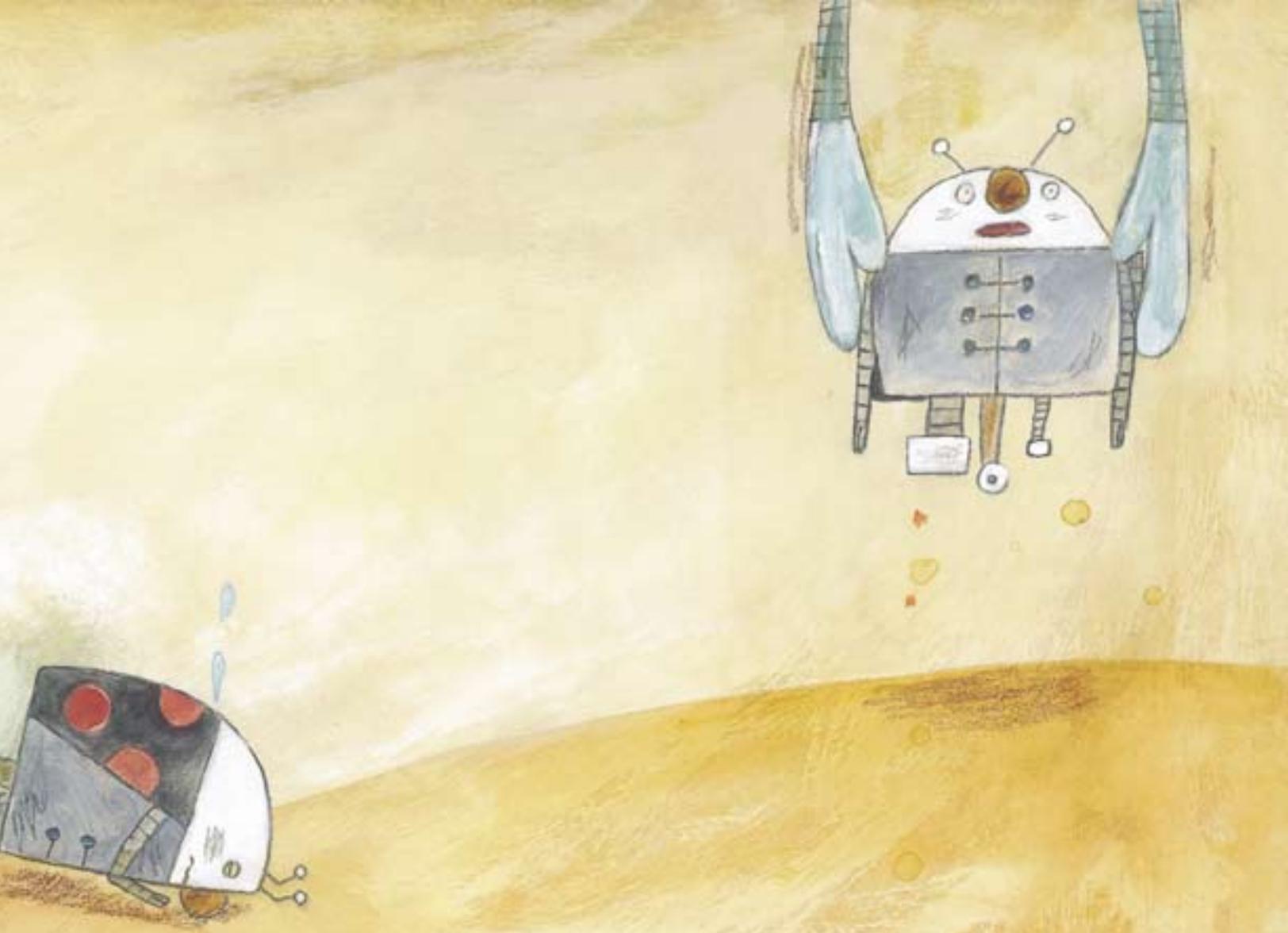
くどいようだがカッコイイ！

バッタ〜ン！

また^{ころ}転んじゃった。

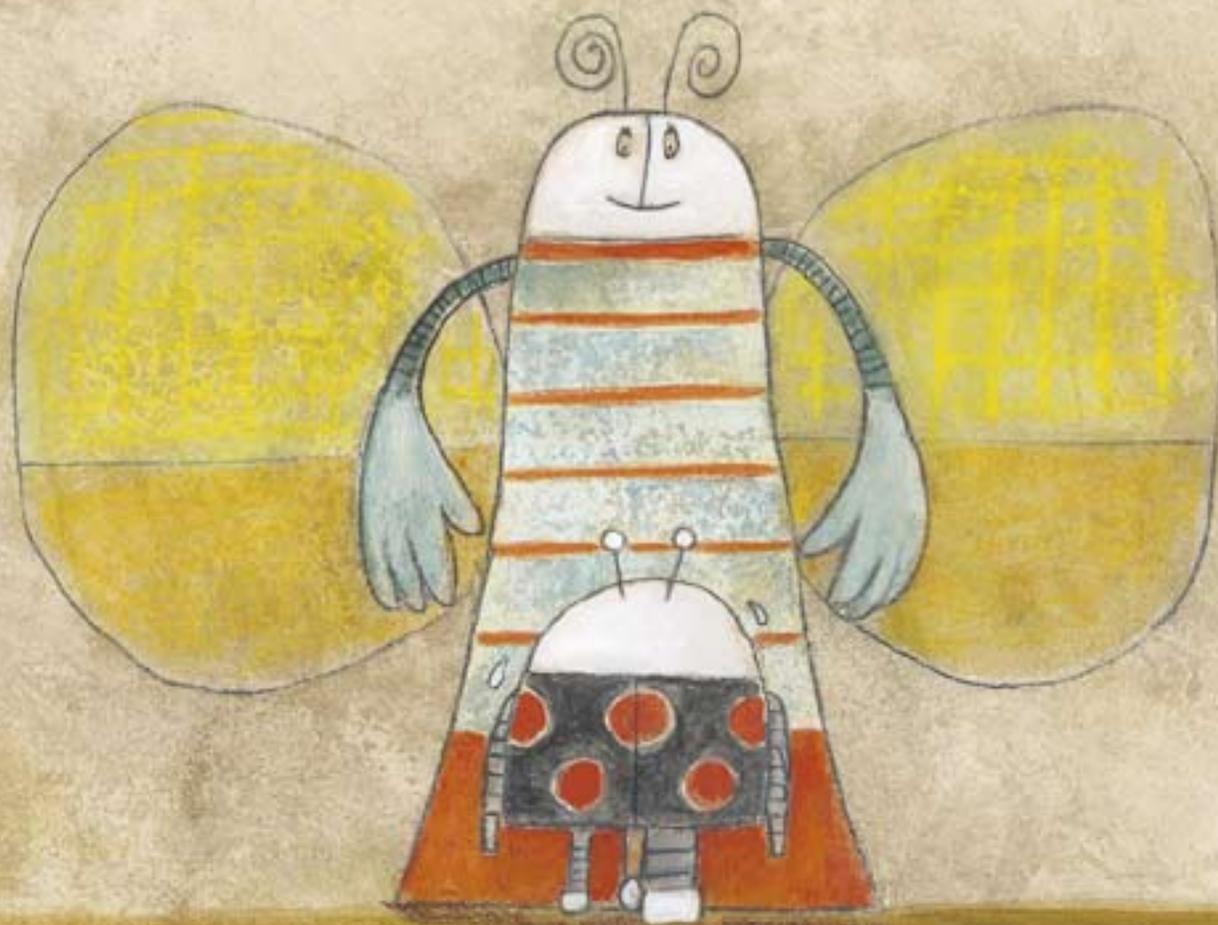
(やっぱりしんどい。寝^ねたふりしよ。

それがいい。うん、それがいい)



けれど、またしても勝手に
体が持ち上がる。立たされている。

(むむむっ)



お おこしてあげたよ。頑 がん張 ばって！」

今 こん度 どは別 べつのお友 とも達 だちの こえ声。

「あ いりがと」とは言 いうもの のの…。

(う し～む。仕 しかた方 はしない。走 はしるか…)

そ はしして、ま はした はしま はした走 はしり だす。

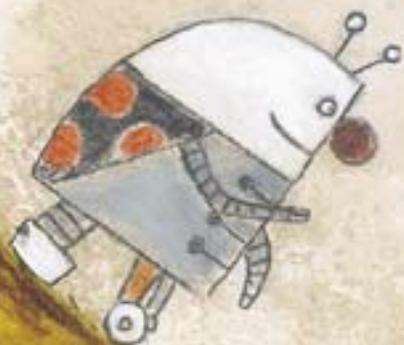
くどいようだがカッコイイ!

ズド～ン!

……やっぱりまたころ転んじやった。

(だ～か～ら～。つか疲れたからやす休むの～。

ぼくはし走りませんから～)



すると、あたま頭ほうの方だれからけ誰はいかのき配気配…。



(ぼくは寝^ねてますよ～。
起き^おませんからね～。
走^{はし}りませんからね～)

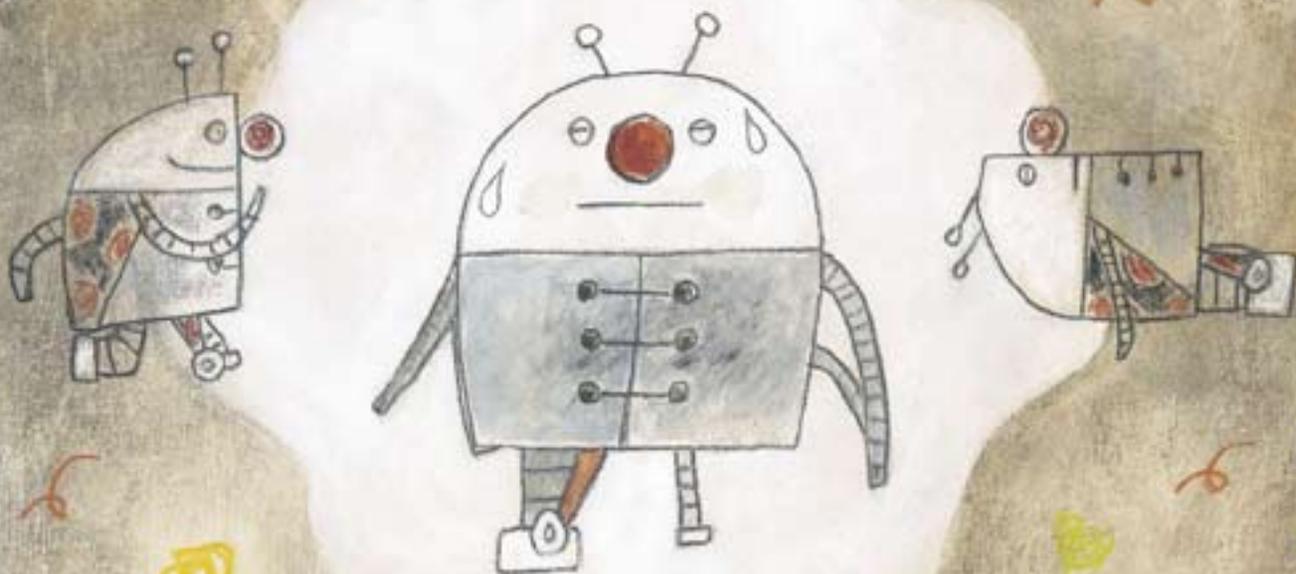
気配^{けはい}は動^{うご}かない。
そう^{うす}と薄^め目^あを開^あけてみる。



ちい すわ
小さく座り、じいっとぼくを
み ちが とも だち
見ていたのは、またまた違うお友達。
め あ
目が合った。

(うわあ！どうしょ～！)

「だいじょ～ぶ？ て つだ
手伝うことある？」
い み
と言って、じいっとぼくを見つめている。



(どうしよう…？^{はし}走る？

^ね寝たふりを^{つづ}続ける？

よし！もう少し寝ながら^{かんが}考えよう…)

ぐう～ぐう～…ぐう～

いつの間にか^ま寝^ねちゃったみたい。



しばらく^{やす}休んだら、また^{はし}走れそう！

颯^{さっ}爽^{そう}と！しかもカッコよく！

ぼくが^め目^あを開けると

「起きるの^お手^て伝^{つだ}う？」とお^{とも}友^{だち}達^{こえ}の^{こえ}声。

「まだ、いてくれたんだね～！ありがとう」

「だいじょうぶだよ！ ちょっと時間^{じ かん}は
かかるけどね！ 自分で立て^{じ ぶん た}るよ」
と、ゆっくり立ち^{た あ}上がるぼく。

ゆっくり、ゆっくり立ち^{た あ}上がり、
また颯^{さつ}爽^{そう}と走り^{はし}だす。

やっぱりカッコイイ！





「こっちだよ～！」

と、みんなの^{こえ}声。

どうやらゴールが^{ちか}近いらしい。

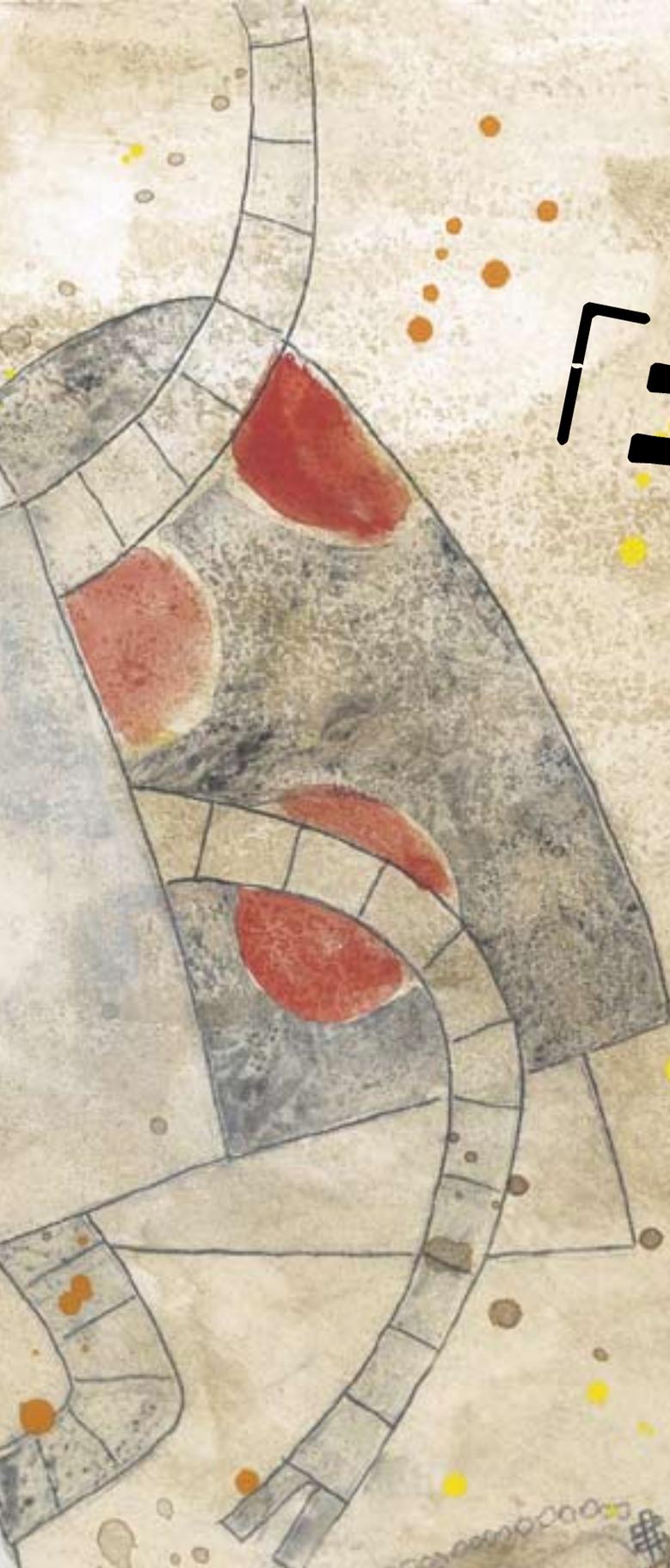
(よ～し！みんながビックリするくらい

^はで、かっこいいゴールをしょ～！

むふふ)



「ゴール!」



ぎゃく

てん

「逆転」

おお ば あや か え
大羽 彩加 / 絵



きしゃ ぼく ゆめ
記者になるのが僕の夢だった。

おとな かな
そして、大人になってそれが叶った。

うれ
嬉しかったよ。

きしゃ
記者をしていると、

ひと はなし
いろいろな人と話をする。

なか ぼく たいせつ
そんな中で、僕が大切なことに気づいた

はなし き
3つのお話を聞いてほしい。

ぎゃくてん
キーワードは逆転。

停電

「逆転」

その日、仕事で遅くなった僕は
地下鉄のホームを改札へと急いでいた。

さすがに、最終電車ともなると、
人もまばらだ。



その時、ぐらぐらっと地面が大きく揺れたかと思うと、

一斉に電気が消えた！「地震だ！」

僕は叫びながら鞆で頭をかばい、

その場にしゃがみ込み、一歩も動けなくなってしまった。

じきに揺れは収まったが、

真っ暗闇の世界は思いのほか恐怖心をかき立てる。

冷や汗が出て心臓がばくばくする。



すると、遠くで「コツコツコツ」と音が聞こえ、
「また揺れが来るかも知れないから、
今のうちに急いで外に出ましょう。出口はこっちです」
男性の声がした。
僕は闇をかき分け、つま先で地面をさぐりながら、
恐るおそる声のする方へ進んだ。





「さあ、私の腕につかまって」

男性は僕の手を取ると歩き出した。

「コツコツコツ」と。壁にぶつかることなく、

「右に曲がりますよ」

「今度は左です」

「階段があります。気をつけて」

この暗闇の中で、彼には見えているのか？



やっとの思いで階段を上り、僕は思わず彼に声をかけた。

「あの…ずいぶん落ち着いてますね。僕なんか、焦ってしまって」

「地震は苦手なんですけど、停電には自信があってね」と言い「ふふっ」と笑った。



かいさつぬあ
改札を抜けたところで明かりがついた。

「ああよかった。ほんとうたす
本当に助かりました。

ありがとうございました」

「そうですか、あ
明かりがつけましたか。

では、ここで。

あっ、そうそう、ちかきよ
近くに來たら寄ってください。

これも何かのなえん
ご縁ですから」



だん せい いし かわ か
男性は「石川マッサージ」と書かれた

てん じ い めい し ぼく て わた
点字入りの名刺を僕に手渡すと、

しろ つえ で ぐち ある い
白い杖をつきながら出口へと歩いて行った。

「コツコツコツ」と変かわらぬ音おとを立てたてて。

「逆転」

手話通訳

ぼくは耳の聞こえない人たちの交流旅行に同行した。

目的地の博多のホテルでは、シンポジウムも予定されていて
シンポジストとして出席することになっている。

新幹線に乗ると、もうすでに向い合わせになっている
3人掛けの真ん中の席に案内された。

— 失礼ですが、お名前は何とおっしゃるんですか？ —

向かいの女性が、手話で尋ねてきた。

僕は、いつもどおりに手話で自己紹介をし、名刺を手渡した。

彼女が名刺の「毎朝新聞」を指し示すと、

— ごくろうさまです —

5人が一斉に、ぼくの同行をねぎらってくれた。

僕は、すかさず拳を鼻につけ

「よろしくお願いします」と手話で答えた。

いい旅になりそうだ。



はか た じ かん
博多まで、あと3時間。

め まえ しゅ わ と か は や しん けん まな ざ ひょうじょう おお わら
目の前を手話が飛び交う。速い。真剣な眼差し、がっかりした表情、大笑い。

とき どう い もと し せん かん
時に同意を求められるような視線を感じ、うなずいてはみるものの、

かれ かい わ くわ
彼らの会話に加わることはできない。

とき とき し しゅ わ み はなし ない よう わ
時々知っている手話を見つけることはあっても、話の内容はほとんど分からないのだ。

ぼく し せん しゃ そう む
僕の視線は、しだいに車窓に向けられていった。



— あなたはどう思いますか？ —

とつ ぜん なな まえ わか だん せい い けん もと
突然、斜め前の若い男性から意見を求められた。

「ちょっと待ってください」

ぼく はな むね うち
僕は、あわてて胸の内ポケットから
て ちょう と だ か はし
手帳とペンを取り出して書き始めた。

「ごめんなさい。

なに はな
何について話されていたのですか？

か
ここに書いてください」

なさ し
情けないほどくしゃくしゃな字だ。



すこ ま かれ ぼく て ちょう と もう わけ か はじ
少し間をおいて、彼は僕の手帳とペンを取り、申し訳なさそうに書き始めた。

あやま わたし ほう
「謝るのは私たちの方です。ごめんなさい。

しゅ わ おも
てっきり手話がおできになると思って。すみませんでした」

かれ ふか ぶか あたま さ
彼らは、深々と頭を下げた。

ぼく せき き くら き なが
僕たちの席には、気まずい空気が流れた。



はか た どうちゃく かいじょう む げん かん さき
博多に到着して、シンポジウム会場に向かうと、玄関先で、

あな まえ すわ わか もの かみ なが わか じょ せい だれ ま
あの斜め前に座っていた若者が、髪の高い若い女性と誰かを待っているようだった。

「あとう、すみません」若い女性が僕に話しかけてきた。

かれ はな
「彼が話したがっているんです」

— さっきは本当に失礼しました。

じつ せい じ はなし
実は政治の話になって、

しん ぶん き しゃ
新聞記者のあなただったら、

おもしろいお話をお伺いできると思い… —

かれ しゅ わ わか じょ せい
彼の手話を若い女性は

どう じ つう やく
同時通訳していく。

いき あ
息が合っている。



「もしかして、あなたは…」^{ぼく かのじょ い}僕が彼女に言いかけると、

「はい。^{もう おく}申し遅れましたが、^{しゅ わ つう やく こばやし}手話通訳の小林です。よろしく^{ねが}お願いします」

^{さわ え が お こた}爽やかな笑顔で答えた。

— ^{ぼく けっ こん}僕たち結婚するんです —

^{ふたり はじ}二人は、^{え が お かお み あ}弾けそうな笑顔で顔を見合わせた。



シンポジウムが始まった。僕のあいさつは3番目。

前の二人の手話は、小林さんが耳打ちするように訳してくれる。

なんだかとても嬉しくなった。そして、僕の番。

はやる気持ちを抑えるように、背筋をぴんと伸ばして口を開いた。

「今日はわざわざ、僕のために

手話通訳さんを付けていただき、

本当にありがとうございます」





勝利の女神

ぼく ちい まち しきよく とき
僕が小さな町の支局にいた時のことだった。

じもと しょうがっこう おこな やきゅう し あい しゅざい い
地元の小学校で行われる野球の試合取材に行った。

うん どうじょう すみ い がき かく
すると、運動場の隅っこの生け垣に隠れるようにして、

し あい み ひとり かあ き
試合を見ている一人のお母さんに気がついた。

おう えん ほ ごしゃせき
「こんにちは、応援ですか。あちらに保護者席がありましたよ」

こえ ちか くるま の ちい おんな こ め はい
声をかけながら近づくと、車いすに乗った小さな女の子が目に入った。

ほそ て あし してん あ め
細い手足、視点の合わない目…。

ぼく ひと め おんな こ おも しょうがい わ
僕は一目でその女の子に重い障害があると分かった。

「ありがとうございます。でもお兄ちゃんに見つかるといけないので、

ここからでも見えますから」

逆転





「もうじきお兄ちゃんの打つ番だよ。

一緒に応援しようね」

お母さんが、女の子の顔をのぞき込むと、
口元を少し緩めて笑ったようだった。

「良かったらお兄ちゃんの写真撮りましょうか」

「本当ですか。この子がいるので、

今まで一度も見に来られなくて、

写真も一枚もないんです。

小学校のいい思い出になります」

お母さんは嬉しそうに言った。

そしてお母さんは、優しいお兄ちゃんに

助けられて今日まで頑張ってきたことを

話してくれた。

お母さんの顔はとても幸せそうだった。

ほんとう やさしい お兄ちゃんなんです。

でもそんな優しいお兄ちゃんが、時々小さな声で私に言うんです。

お願いだから、妹を学校にだけは連れてこないで…って」

お母さんは女の子の頭を撫でながら

寂しそうに言った。

「だから、お兄ちゃんに見つかったら

大変なんです」と笑った。



いよいよ、お兄ちゃんにいの番ばんがきた。僕はカメラほくを構かまえた。

カーン!

「お母さんかあ、お兄ちゃんにいやりましたよ。逆転ホームランぎゃくてんです!」

思わず叫おもび、お母さんさけと一緒にかあ飛び上いっしょがって喜とあんだ。よろこ

ふと気きがつくと、お兄ちゃんにいのチームこの子たちこがこちらをじいみっと見ている。

そして、こちかっちきに近づちかいて来た。



あつという間に、お母さんと車いすの女の子は
取り囲まれてしまった。

「なに、なに？」

「あいつ、妹いたっけ？」

「この子、生きてんのか？」

お兄ちゃんとお母さんは、
この場から消えてしまいたいとばかりに
縮こまっている。



すると、そんなお兄ちゃんにいと

お母さんの気持ちかあ きもちを察さつしたんだろうか、

ひとりひとりの子こが車くるまいすの女おんなの子この手てを取り、

顔かおを近ちかづけて言いった。

「この子こが応援おうえんしてくれたから

勝かったんだ。

勝利しょうりの女神めがみだね。

応援おうえんに来てきくれてありがとう」

ってね。



これで僕の「逆転」に出会ったお話はおしまい。

僕に大切なことを気づかせてくれた「逆転」を、

君はお話の中に、見つけられたかい？



おしまい

あとがき

この絵本「じんけん2」に収めた物語は2編、「ぼくのペースで行かせてね」と「逆転」です。前作「じんけん」では障害をかかえることで、どんな人生が待っているのか、その一部分を紹介しながら障害者理解を求める作品にしましたが、今回は言わば「ノーマライゼーション」を考えるきっかけとなることを願って仕上げました。

「ぼくのペースで行かせてね」では主人公の「ぼく」が何度も何度も転んでしまいます。それを見て「あっ、助けてあげなくちゃ」という気持ちになれることは、とても大切なことです。「ぼく」にとっても確かに嬉しいことではあるのです。けれど、「ぼく」はカッコよく颯爽と走りたいし、カッコよくゴールも決めたいのです。何度も転んで、しかも休んじったりして、傍目からするとやきもきして格好どころではないのかもしれませんが、でも「ぼく」には「ぼく」なりのカッコよさがあり、颯爽と走るイメージや目的、意思があるのです。

人には人生があり、それぞれに希望もあります。もちろん、障害の有無なんて関係ありません。現在、福祉の先進国スウェーデンには重い障害者への自立支援の一つとしてパーソナル・アシスタンス法があります。その支援の形は、いろいろなサービスやそれを行う事業所があらかじめ決まって

いて、そこから支援を選択するのではなく、普通に生きるために必要な支援費が障害者それぞれに支給され、本人自らが雇用主となって必要なサービスを作り出すというものです。たとえばオフィスで働きたいとすると、そのオフィスで働くために必要なサービスを自ら雇った介助者から得られるというものであり、そこでは「市民として普通に生活する」こと、「普通に自己決定する」ことが権利として尊重されているのです。

「逆転」は三つの物語で構成されています。一つめは「停電」。主人公は突然、光のない真っ暗闇の中に身を置く羽目に陥ります。しかも地震の揺れとホームからの転落という二つの恐怖にさらされるのです。そんな時、思わぬ救助の手が差し伸べられます。なぜこんなにも冷静でいられるのか不思議でしたが、暗闇は視覚障害者にとって全くハンディーにはならないのです。地球上の光がすべて消えたとしても、彼らは「ノーマル」な日常生活を刻み続けることができ、ノーマルとされている晴眼者は障害者として支援を受ける立場に変わってしまうに違いありません。

二つめは「手話通訳」です。聴覚障害者のグループに同行した「僕」は、講師として演壇に立つこともあり、その時にはいつ

も手話通訳が付いて、会場にいる聴覚障害者に話を伝えてもらうことに慣れていました。それに、あいさつや簡単な会話もできたので、手話には少し自信がありました。ところが一瞬にして自信が失われてしまいます。健聴者は自分一人だけ。これまで聴覚障害者に理解がある方だと思い込んでいたのですが、それはあくまでも多数を占める側に立っての「理解」だったことに気づくのです。つまり、手話通訳は聴覚障害者のために必要であって、まさか自分のために必要なものになるとは思ってもいなかったのです。「僕」は手話通訳さんの登場で胸をなで下ろしますが、それと同時に人と人とが理解し合って関係を深めていくのには、何が必要であるかを改めて知らされることになるのです。

最後の話は「勝利の女神」。重い障害のある妹を学校に連れてくることに、少なからず抵抗感があるお兄ちゃんに内緒で、お母さんは妹と学校に来てしまいます。これまで妹の介助にかかりっきりで、なかなかお兄ちゃんには関わってあげられなかったのでしょうか。小学校最後の野球の試合ということで、どうしても見てあげたかったのです。お兄ちゃんは野球が大好きだったに違いありません。そんな時、そのお兄ちゃんが逆転ホームランを打ったものですか

ら、大喜びしてしまいました。「しまった。どうしよう」一転して大きな不安におそわれます。お兄ちゃんが妹にもお母さんにも十分過ぎるくらい優しいことは分かっています。そのお兄ちゃんを傷つけるような事態になったら……「僕」も息をのみます。

案の定、子どもたちは妹に近づいて、とうとう取り囲んでしまいます。お兄ちゃんは少し遠巻き。お母さんは、お兄ちゃんの不安な表情を見逃しません。「どうしよう」動揺は絶頂に達します。でも、「この子、勝利の女神だね」ある一人の子どもの思いがけない言葉がみんなを救ったのです。お兄ちゃんも妹のすぐ近くに寄り添うことができました。言葉や考え方一つで障害者との間にある壁なんてなくなってしまうものなのかもしれません。

健常者と障害者との間に壁とか囲いなんて必要なのでしょうか。互いに尊重し合い、互いに必要とし合える、そんな心のバリアフリーを私たちが実現できたとしたら、どこへ行っても、どこに住んでも、誰でもが豊かで幸せな人生を送ることができるように思えてなりません。

田原人権ファンクション委員会

田原人権ファンクション委員会は、障害児の保護者、田原市手をつなぐ育成会、障害福祉事業所、田原市教育委員会などに所属する14名で構成されています。すべての人々の人権が尊重され、差別や偏見のない社会の実現を願い、平成21年度、文部科学省の委託事業「人権教育推進のための調査研究事業」として、障害者の人権擁護のための教材となる絵本を作成しました。

平成21年度文部科学省委託
「人権教育推進のための調査研究事業」

じんげん²

2010年2月15日 初版 第1刷発行

文 田原人権ファンクション委員会
絵 山本希、大羽彩加

発行 愛知人権ファンクション委員会
田原人権ファンクション委員会（田原市教育委員会内）
〒441 3492 愛知県田原市田原町南番場30番地1
TEL 0531 23 3531 / FAX 0531 22 3811

印刷 共和印刷株式会社
〒441 8042 愛知県豊橋市小池町36 1
TEL 0532 46 3281 / FAX 0532 46 3285

絵本制作メンバー

川口侃（委員長）、小林明夫、明石明子、新井在慶、石川祐子、大羽彩加、緒方幸枝、糟谷治子、北原初代、小久保悦子、菰田尚史、柴田裕樹、鈴木照美、寺田孝士、細井美加子、間瀬勝哉、山本実穂



田原人権ファンクション委員会